平成 28 年 9 月 26 日

2016　奈良県立医科大学・和歌山県立医科大学
学生災害ボランティアバス　復興支援活動
活動報告書

Ｎ　Ａ　Ｒ　Ａ　　Ｗ　ｉ　ｌ　ｌ
奈　良　県　立　医　科　大　学
学生災害ボランティアグループ

1. 活動概要

奈良県立医科大学学生 12 名は、和歌山県立医科大学学生 11 名とともに、平成 28 年 8 月 25 日（木）から 8 月 28 日（日）の 4 日間、福島県内でボランティア活動などを行った。南相馬市小高区では被災者宅の片づけなどの力仕事ボランティアを、南相馬市原町区では仮設住宅集会所での傾聴ボランティア活動を行った。国道 6 号線を富岡町→大熊町→双葉町→浪江町→南相馬市と北上し、被災地を視察した。福島県立医科大学での福島災害医療セミナー夏期短期コースと、南相馬市立総合病院での及川副院長先生の講演を通じて、福島の現状や住民の健康問題、放射線などについての講義を受けた。

2. 主な活動

25 日（木）	朝：飛行機にて関西空港から仙台空港へ移動 午後：福島県立医科大学にて災害医療セミナーに参加
26 日（金）	午前：福島県立医科大学にて災害医療セミナーに参加 午後：南相馬市立総合病院副院長　及川友好先生の講演を拝聴 夕方：被災地視察（南相馬市～富岡町）
27 日（土）	終日：力仕事ボランティア活動（南相馬市小高区）
28 日（日）	午前：仮設集会所にて傾聴ボランティア活動（南相馬市原町区） 夕方：飛行機にて仙台空港から関西空港へ移動

3. 参加学生

医学科6年：中務智彰、佐々木建人
医学科2年：田中俊志
医学科1年：平山和秀、辻野文甫
看護学科3年：津地ひかり、前田結里
看護学科2年：井上麻理子、森岡伸子、三阪ひかり、志野まなみ
看護学科1年：阿部彩乃

4. 福島災害医療セミナー夏期短期コースへの参加

福島県立医科大学にて放射線についての講義を受けている様子

災害医療セミナーでは、「震災後の福島の現状について」「福島県相双区の心のケアについて」「よろず健康相談」の 3 つの講義を受講し、「熊本地震でのそれぞれの活動」について意見交換した。「震災後の福島の現状について」の講義では、放射線についての知識を、福島県民が経験した困難、住民が感じている不安と共に学習した。「福島県相双区の心のケアについて」の講義では、人命が最優先される非常事態に、人々の心のケアを早期から開始する必要性や方法について、また精神障害者へのケアの課題について学んだ。「よろず健康相談」は、福島県立医科大学が災害医療センターと協働し、福島県内の原発事故避難住民に対して行っている個別相談会で、模擬演習では住民と医療従事者の役に学生が分かれて行った。今後災害が発生した際に、医療従事者がするべきこと、出来ることについて真剣に考える機会となった。「熊本地震でのそれぞれの活動」についての意見交換会では、各団体によるボランティア活動の成果を、グループに分かれて共有した。個人の今回のボランティアへの思いやこれまでの経験、大学のボランティア団体としての活動の課題についても意見交換した。

5. 南相馬市立総合病院副院長　及川友好先生の講演

南相馬市立総合病院副院長　及川友好先生の講演の様子

阪神淡路大震災と東日本大震災の被害状況の違い、原発事故によってもたらされた事象や風評被害の問題、現在の福島県が抱える「生活習慣病患者が増えている」といった医療問題、そして医療問題に対する健康支援の方法などについて講義を受けた。また、震災当時の南相馬市立総合病院の状況や、病院の周囲の状況を、経験談を交えながらスライドで説明を受けた。震災当時の混乱は想像を絶するものがあった。及川先生は、震災直後も避難することなく病院に残り続け、病院と患者さんを守ってこられた先生で、そのような方からお話を聞けたことは、非常に貴重な機会であった。

6. 被災地視察

南相馬市小高区海岸にて。過去の同じ場所の写真と見比べながら、説明を受けている様子

国道 6 号線を富岡町→大熊町→双葉町→浪江町→南相馬市と北上し、被災地を視察した。所々でバスを降りて過去の写真との比較をしながら復興状況について説明を受けた。津波の被害が少なかった地域や放射線の空間線量率が低い地域では何もなかったかのように見えるほど復興が進んでいる一方で、帰還困難区域など

は、震災が起こって住民が避難していってから 5 年間そのままの状態で残されていて、当時の住民の生活の跡がはっきりと見てとれた。除染作業で出た放射性廃棄物を詰めた黒いフレコンバッグが積み上げられている場所が以前よりさらに多く見られた。海沿いの町は、瓦礫は綺麗に片付けられていたが、家を再び建ててはいけない場所も多く道以外ほとんど何も無いような状態だった。津波で壊れた堤防の修復工事も進められていた。視察後、初めての参加者は復興の進行状況についてマイナスの印象が強かったのに対して、2 回目、3 回目の参加者からは復興のスピードの速さに驚いたという声もあった。

7. 力仕事ボランティア

南相馬市小高区の被災者宅の小屋にあるもみ殻を袋詰めしている様子

平成 28 年 7 月 12 日に避難指示解除された南相馬市小高区において、2 つのグループに別れて力仕事ボランティアを実施した。グループ 1 は、午前は被災者が経営していた飲食店、午後は被災者の自宅内の片付けと周辺の草刈りを行った。グループ 2 は、午前は依頼者宅の小屋にあるもみ殻の袋詰めを行い、午後は果樹園の草木の袋詰めを行った。グループ 1 では、人の家に土足で立ち入ることに罪悪感を感じたり、思い出の品を捨てる事に抵抗を感じる者もいた。グループ 2 では逆にもみ殻と草木の袋詰め作業を黙々とこなしていき、前述のよう抵抗感を持つことはなかった。被災者の方々は決して震災前と同じ生活空間や生活様式には戻れないということを、両グループとも目の当たりにすることができた。

8. 仮設集会所での傾聴活動

南相馬市原町区仮設集会所。奈良名物のお菓子とお茶を囲みながら、学生と参加者が交流している様子。

南相馬市原町区の牛越第一仮設住宅と牛越第二仮設住宅の集会所にて傾聴活動を実施した。南相馬市小高区から避難している方々が多い避難所である。第一仮設住宅は 10 名、第二仮設住宅は 14 名の方々が参加してくれた。奈良、和歌山名物のお菓子とお茶を囲みながら、学生と参加者が交流した。また、血圧測定、アロママッサージ、ラジオ体操、クイズ大会も行った。2011 年に傾聴活動を行った時と比べ、参加者からはこれまでの体験についてだけでなくこれからの展望についての話を聴くことができた。震災から 5 年という月日が経ち、住民の置かれる状況・心情は共に変化している。経過と共に変化する住民と地域のニーズに合った活動を行う必要があると考える。

9. 全体を通して

今回の参加者のうち、約半数はボランティア初経験者であったが、「来てみないと分から

ないことがたくさんあり、テレビを観ているだけでは分からない福島の現状を知れた」「本当にここに家があったのか疑問に思ってしまう」「5 年でこの現状ならあとどのくらいの年月をかければいいのだろうか」などの意見が出た。また、復興のスピードが早いと感じる者と遅いと感じる者と捉え方も様々であった。「私達がボランティアをすることで被災地ふくしまの役に立てるのか」、「私達に何が出来るのか」という意見もあったが、傾聴活動や力仕事ボランティアを通じて、被災者の方々から「来てくれてありがとう」「来年も待っているからね」という言葉を頂き、被災地の事を忘れずに活動を継続していく事の大切さを痛感した。少しでも多くの学生に被災地ふくしまを訪れてもらい、各々が「震災」について考える機会を持ってもらうためにも、この活動は続けていきたい。

10. 協力

公益財団法人 JR 西日本あんしん社会財団
福島県立医科大学災害医療総合学習センター
南相馬市立総合病院
南相馬市社会福祉協議会南相馬市災害復旧復興ボランティアセンター
公益財団法人福島県青少年育成・男女共生推進機構福島県青少年会館
農家民宿いちばん星
Fukushima WILL（福島県立医科大学学生災害ボランティアグループ）
Wakayama WILL（和歌山県立医科大学学生災害ボランティアグループ）